朝顔

二

へ 5
2109

利5
2109
巻

明治三年四月二日
藤澤清氏寄贈

旦暮葬野巣父孔追福小低諸の集
者〻ゆ学流を究学小魚肉を蓮花
什おかゝ〻ゆ志おの。心を遠きものを
採多毛て〻ゆ世の諷誦捻香乃
体裁小十〻ゆ孔ゆ学孔ゆ〻お

乃ち不易流行説を起し一派の風を創起し路ふ
なる道り一の教を開きゆえ以の教
以者芭蕉翁の翁世に先哲乃ち
あらへる一時流行に従きを看破
して千歳不易の風を創起し路ふ
いさ〻言葉を伝授手話字用へ京

の人に向上に一路り拙家する自
あ老荘の地を求めて都て古来
に有と云ふまでもなく世に
句を以て世に生る世花
ちなに有ち有先ちと事も不時に
言信美義に其の世に殷郁ちる

姐夏をつゝね苔樂宗の形て宗て
まはゝたきもれ人間もてたんとゝるる
をゝれるふ世よ人のゝるをかゝへて
宗ゝみまゝ宗きゝれあれ法則を東
縛おゝれて於のゝ形るあめ者
地孔をよの者るきゝるゝ一乗の

迷福をゝまゝめ鳴呼ゝ者
解脱を

天保三年壬辰秋

一具菴杜多愚春

寂雲　憲齋書

京都帝国大学図書

藤原潔氏遺愛之記

新續集上

秋乃部

白露乃ふるもとゝ乃の稼　定知

幻世乃けさ乃はつ今朝乃秋　下サ　幻芝

七夕

美しき秋乃一筋乃天乃川　社地　ゆうき

七夕乃伝文乃書乃流寺　晃之　一丘

使小袖乃ふるとて人乃逢ふらう　日人

梶の葉や梳れもの小さはめ　い朶

立春小清水飾や揚まき　越後　芝葉

灣杭の雪ゆゑ梅星此笹　柱寄　芋夢

月泊楼上

金入るとみるまもなくみぞの門　八百市場　鈴哉

吳衆　金月

年用宝暦の集雪も掃きすて　卓池

まれまれ賄いするや壹衆　下サ　四明

年の内に嫁菜摘ける人数　上伏　蓮隆

寒ぶるに誠に成せるも寒祭　大海　こよめ

辺鄙の菜ゆゑ鶴を頂角　亀こ

毋の寸句に数れ手形して

いろ〳〵寒きを名れたる理

寄の内に土産さ〳〵多人数　江戸　雨槿

一ツ消えて二ツ成仕竜言竹籠　下サ　江角

垂のあり様ゆ〳〵すまして

灯籠ともしかねて折しも大井川　篠級　布席

美しかりしき出屋の遊女の風　市蓼　雪頂

一葉　桔梗　秋風

産月花雪に麻浦し一葉の秋　卯巣

まもれと言ふものなり梅ちる風　武蔵　楽の

温泉の底に月の影や鶯の風　江戸　白雪

白雪のよりの日暮淋しかれの秋の色　宗川

移住花ふる初雪おもてきまり風　浜松　梅巣

波山に沿て

枝に根ふ秋の色ちらせ高の川　久城

楽山在平中

山に過る実を桔梗やあきれの色　八朱

い新　まもしたて

八朝七森こうたよりて東かすること　吉野　巣也

きつさや賭碁に花のみとさとる　福寺　桂裡

歩行ふれ市ある尾の蟬　粹　禾木

蕉かな毋細書あり　林書

日ぐらし　生駒額

烟の影もちらす雨鳴の寺　下寒　峰丸

ちらす時雨あはれを食ひ　市席

小豆もむ笹のちまきや安宅の関　水戸　鬼子

二十三夜の月代や鳶の巣涼　京上　如旭

水鶏鳴や何人もまもしの影　米沢　了

名月　柱物嶽

紅葉せり蛇苺の下モ女　福島　一翠

あさぼらけ利休は娘見る菊　蜂岡　清風

菓也時雨人は茶の湯の気　能子　桂丸

名月や菓園見て歩く折木槿　漢岐　麦蛭

中村淡林

もさもさのもさもさしたる花の庭　久城

蕎麦の花ほのぬかるみ来る升　岩城　南山

蛇の田や八つまち寺風福祉と　江戸　可目

雖然此一日晴夕雨来
持参此魚を煮き書椒　東洋（トウヨウ）
活らかしてあかきを逸る　ちさう（加度）
夕氣の出来て桃枝の永　三蓼（アキ）
こかを草をこかして晴ふ蕎麦　桃尚（ハタ）
逢中　菜白
立留る此花ちらぬ事を　護物
おくれ長き折後を思ふ　當笠

女郎花夕氣出られぬうち　このつく（横浜）
炊き此米ふけきらぬ京花　芙蓉（芙蓉）月
末枯をこかの枯るるあれ　白坡
月
名月や豆腐屋の門を長井戸一ツ　惟竹（ハタ）
名月此一番を来る眠る　啞菓
月中夕歌一路此雲を
あるの法橋の美き人と
きを等て

波打ち風なうやとる秋月　大梅

岩葛原うり床れ七ゝまて

竹葉こ集はけるあり山月　蓼丸

こ年ぞてよい乗ちり月迎雪　一肖

厩まて筆を〇つゝ月見こ南　大四　尺葉

名月や竹燦ゝ来る猫の風　魚妻

風月の詩よう〻ゝ春風名所の

枝学ふ古ゝて西ゝ麻ゝ得ゝ

吟物ゝ屠ゝ秋ゝ国中月ゝ宵　一具

明月や一星出ゝ光庵社宮　布腐

名月ゝ木ゝ木ゝ社ゝ宮ゝ沈の中　京撲

月清ゝ毋の聲ゝ風ゝ恒清　伝長　蟻兄

望の夜ゝ雨ゝ津ゝ風ゝ山ゝ

しゝて仲秋の宮ゝ光ゝ宮ゝ

と雪ゝ雪ゝ雪ゝ清ゝ清ゝ

中ゝ秋ゝ月ゝ宮ゝ　物宮

十六夜の月宮彼宮ゝ光ゝ宮ゝ　一蕉

いさよれ月しゝ佐蕉ゝ西ゝ者　一々

露　つゆ

大悲天寺の地を寄せるの
張り　賛のうたれて

露の月子孫はかなかりけるを　久滅
箕を置て形もなきはかなのみ　禾木
ハ月と九の方もしるの露　雉嶺
白露を乃て迷入者もめ小汁　白桂
第月二十日薬地出発の手紙
りんのうたれ
代り露雲乃うあ出坊　鹿

より出て酒屋をはきれ雲れ　梅令
糸書とかねは塔やはしられ　野栗

秋水　しうし　蛙著

芝居場へ潜りとなるを秋の水　南旧
と要し雨れ出んよ落しあ　隨和
向ふ見つまるを出るを紫　月嵐
は馬をかねうれ事ふれ　朱沢
蓑を寄次出猪の著　牡年

立枯れ樹に伐ぬやあきの暮　詠歸

暑かりし日の照りつゞきて秋ふかき　イセ 推巳

蕣の露ひかりものかなし旅の宿　フシ 朝翠

抱子の死て悲む櫛枕の前　北枝 含吐

菊

仏の日

馬よけに隣に移してきくの花　江戸 桐家

むし流る起て一日米久しきも　イセ 肯居

ちよちよと花の隣までも菊作り　筆情 よし。

若松

捉て引菜の津や鶴見川　羽州 一路

いつまでも白いはやれ瑞まきく　米沢 古翠

彩居に豊年まきちらし
背比べりしまたちまし

えつてきてもそ粉を菊のとひ　大梅

なにかえへ菓子見乍ら月　一蕙

先の数に入らし顔のみ十三夜　望栄

刈萱に寄して文字十三夜　白石 華雄

[illegible]月見　斗遊

擣衣　もゝ矢

月の秋よりはなはだしきゆゑ　サウヤ　巴雲

小歩行屏風　きて夢覚　越後　万宝

泊屋　すゝしみちれば　丹陵　蕉夢

蕎麦の葉　蕎麦の花　一具

九月十三

ゆく秋や咲ちる前の菊　斗米

冬の部

時雨

主筥に掛風呂敷や初時雨　来沢　太楊

笠寄せて来て来年の神ぶれ　丹後　蒿籟

小夜の中山にて

菓川へ下りて十三里と呼るゝ　史千

しるるや餅ちれ柳よりる者　ハヤ　松巣

去る留もあり他人のまゝ連　注志　丈韻

畑中に鳥取無り時雨哉　二本松　白人

鶯の鳴中へ降るし哉　尾張　我竟

百あまり渡事也とより時雨哉　伊勢　馬年

何のよもぎ餅ぞ社哉　大和　古彦

市ヶ谷に第六の摂州有り　彼岸参

日行二人と考る　彼岸

乃ち新参に引手かれすまぬ

鷹あり哉第六時雨哉　一具

一世雨しを蔵法師の屑　福山　大費

柿の木に鶏ねぶし　夕ぶ入鹿　風也

ゑるゑる我ぶ生へ時雨哉　岩槻　蟲浦

神無月

多ふものて日暮ゑて神無月　鶯笠

鉢焼に柳ゑ出弦巻神芝月　大和　白秋

十月の花の下ぶ炭一俵　井屑

出留まるゑ考てるゑ義に神　鈴巣

木光寒とあゑみ竹也茶ゑ俵　史子

湯治（ユシマタ）茶村ゆ

鎌倉時代寿永元年根や冬木白　方居（古田）

冬十月梨

物ゑさ元宝板こうけく石ゆ　あちあ

ゆつ〻と賦社数まんふ地　一毛（重教）

遠摩長や竹子漬け塩ゆ元　古翠

ちせと忘れかきへのあき絵ふ孔　乙負（米沢）

清菓

おちう柴を忘れて見る家世　仁乃（江戸）　伊縄

笑戸押を八賞戸けよあ清菓孔　丹後　柳宗

ゆ〻しいもそふ掃久ゆちゆ下　笠敏　一甫

省住元西ゆ沈ゆあ風菓孔　米沢　不祐

お伊ふ菓菓一清頂焚きう　勢菓

柘草　柘和れ

謙西ゆ柘孔ね柳元う和ゆ孔　米沢　貝谷

猿乃宰　花あれば枯野哉　二丘

鶴ふきるしらぬ枯る野川哉　岩槻　東岱

馬の糞を乃くしるふや枯蘆　常陸　鼎湖

冬ながら第の咲きり門徒寺　江戸　洛芝

寒菊と筑波は見ぬ枯れ　下野　小第

日陰かるる名ばかり枯柏の葉　木木

十六納堂梅を賀念

水仙寒床に飾りて字ある花　大梅

とるるまで十一月そろ仙哉　芋井　上総

水留の取得ぶるもあり水仙花　太田　蒙民

水仙よ湯殿に出て考て日南のあ　高崎　彩水

寒梅や居買人持て来る酒屋　米沢　左真

ふるう　水ゆる

鳥海ふ蕎と聞ゆ千鳥哉　酒田　大眠

この寺れば宿の高や小歌ふ月　江戸　達宇

水ゆる井を面て居る枯木の方　七秋

雪

初雪や小一藏の風雑書　三石　富百

町内の新し京なし雪もふる風　米沢　宇多

凡そ仕て森支度きそや東の空　いた　三子色

横雪や海よ荒てゆく汐のあと　サツマ　雪松

願ふてもない御雪や屋敷　古聚

板塀よりてる雪も浦住の郷　ツシ乃　雪仙

有もの自きそ岩まの相
ちきそ院凡そ小ぶり

鏡さる追浮世や雪のあと　一雪

打霜やすまる立て風袴あ　西月

霜ぶきら〳〵来れ鹿の為明星　高田　双凡

ゆふてはるれぬものや雪の影　いた　謝世

蛇恩講

鉢植や門それ講れ人通わ　仙京

いと大屋敷小屋飯ふう接恩講　京上　梅周

人先へ来ふ強ふ出一面越　久藏

紙衣　市園

対馬守殿命ぜられ二日三日ゝ　岩城　夕山
半ばに不ち紙衣の手入の事　哥栄
日常小屑ゝ風呂ゝ　芦帆
勢藏の健の事ゝ出る事ゝ　紀後　仙翁

精炭　埋火

手ばしの火ばちや精の上　正江　芙丸
前幾ゝ出ゝて平槽の事　信濃　岩峰

炭売ゝ言葉ゝ書ゝ事ゝ賀の破　芦尺
笛ゝ吹ゝ吹ゝ岩火の形　卓池
次ゝ草炭刻ゝ事ゝ踏ゝ机　芳居

老慵

炭ゝ粉ゝ勇気ゝ出ゝ久ゝ踏ゝ尾　梅宝

板谷嶺

岩竜ゝ老ゝ事ゝ九ゝ　一具
埋火ゝ行ゝ蝿ゝ出ゝ　紀後　陸河

冬月　冬

栗粥取掛下ぶるや冬至月　太田　越川

枇杷と見れの目やふ地の月　一臭

宝宝や一すれやうよ任蓑　ぶた　杏陰

月よ雲中〜星れはむされ　太田士人　一位

よれ辻と書宮れ見ゆる宮れ　様堂

見ゆさへ柏ゆの法や納豆汁　太田　方居

鮫噌の名をゆる白髪氣又ル　仙ゲイ　松蓑

鉢扣

川風やまこ吹るゝ寒鉢扣　一々

石畳なゝ藝れあるや陣ゝき　曙蒙

鉢ゆきまゝ花よあ夜雅みゆる　東一

歳暮

この越へ日れまゝは見ゆ梅のも　ぶた　ちゝき

年忘れる祇あゝれや煤拂　、涼嵐尼

懶惰にして工夫なき俗子や梅花に向き　素南（少九）

工夫して年を日々すまして獨り居る　九六（大四）

東坡が友迷ひ出でし師走の雨　多女

人あのこして去りし年の市　淡吟（イサ）

熱風を祖父のこしたる夢　魯恭（越中）

蕉を植ふる心の奥の乃ち飛　蕉盃（大四）

芋虎を仮形とする蛙も
きみとまりて世空を学ぶるれい

行年に笠をふり捨て相果て　史子

ゆゝしきやあるふ似つゝ風蓑の雪　一具

年内立春

歩まずして歩まず手紙ならぬ年の首　梅宝

十二月二十三日立春

雪の中に歩まず来るのゝ事の内　布席

必竟荘周不欺我

去年と気よ様るまや大三月　大梅

享和三年八月七日

於尾花庵真行

朦朧もあるもれあう高の玉　句こ

ゝろとも火とも焚育明れ月　一徑

酒瓶の水ゆ水ぬきれのさゝりて　〃

貢乃魚とし子さ角一学　句

八歳者の羽根の武蔵平筵ゝ　〃

さ車ゝのゝてゝ　徑

留まるの尽小樂天の詩を曲てきる、
身を捨てる此頃河契沖　玄
板時雨の伏屋を取巻く、
迚世話しる鶯は吸もの　徑
古の境つくと滅きぬる、
蛍のうつまるまて運れあるゆる　玄
月落る方より風は吹出て、
清乃松は秋を待てゝ　徑

岩きりの多野は撫むく里八流迚、
うつ夏き雨の花は見れ者　玄
散しうれ蛍の跡は不用となる、
佛は右月に住這ゆ　徑
水留人の結れし蛍は見ぬ、
鶯の白毛は出来れい河花　玄
蛍は宰は寿の鳴夏うれ、
おのゝ無うれ啞蝉は見留　徑

一言初て藥師と唱る毒
虎ハ鹿島の神の使者と
なる事ハよい事也雪ハん
同鏡みるなり目ハ
小而高を葩ハ一蕚
行ハ寒ちれ作の生れ
雪ハやはりん月見ハ数年
出間よまれい稚る数の雪

この事ハ喧嘩ハ尊ハ引きて
破ち橋を馬花ハ生れ
鴉うる拾ハ霜の古毎金
をうれて一ッ白鷺ハ飛
花ハを仕立あけ毎ハ
桜ハ花衣着ハ裏

玄ニ十八句
一徑十八句

且暮葬興行

埋也圍有てゆくり庭の尾ゝ　歸巣
月下に夜ゝ去る風明るし　久滅
雪ゆゑ夜の月を表にへて　方居
む邪葬角てゆまゆ取ゆり　巣
梅の木を懸りて一持こまれ　滅
きさらぎ水を解ゆ和ゆを　居

操をもてむかふ祢宜の代の事　巣
小者と居あるを産社迄行き　藏
手ぼうの鬼のむまれ兼ねり　居
紙を巻きて以て巻て生ず　巣
朱絵ちと沼を見ぬ古今集　藏
人ぬのみすがの巻の貫もれ　居
十ばくの里を見て自解　巣
ほったる林を將れけるに　藏

世下を棒に海をはまれ舟さて　居
松をぬ恋れ浦を捕社兼さん　巣
秋をも寒れ花をもし　藏
春かをもせ策市の人者　居
春先をハをも毎ゆゆる下馬乃角　巣
見てはすがし犬ばるれ法ち　藏
病ぬ髪を唐紙を結ぶつ事　居
あるを形しのるを見ぬ程さ　巣

川に柴四五ばかり掛みだれて　臧
江戸より来る客人屋敷に出る　居
法僧て浮て佐渡ヶ嶋の袋ヶ表なる宮崎の浦　巢
臧
面白かりしかとも生れつきす　居
願て書て見留る事ハ大津絵　巢
名月をはつかしき雲ぬきもし　臧
蒔絵屋尾張ハ飛くふ法久　居

この夫婦の夫婦ハ絵なのせ　巢
安話しを書てあるかの説　臧
常宗五てをあれと法ろめ　居
橋をかけ吉あ花ハ体と法し　巢
響この所ハ竹をとりあてあるかく　臧
蛙ハ祢ろ人業法ろてわろ　居

野菓十二句
久滅十二句
方居十二句

精進やとしゐるよりの仏社灯　梅宝
門社槻千年経る本居　野菓
形のみし僧のの迎寺本て　一見
笑ふて落る鶏社参て　宝
待まち人て森ゆる事宮社月　菓
あき地の野ふこの寺ゆる迄　々

毛人等が菌母が来ぬ浦乃葉社　宗
分刺ふ陸奥ふ賀ふ蔦　菊
論ふて吉ふ也ふ伯父坊主　々
大晦日ふ越る　白川　宗
孫切社叔ふ佛ふ吉ふ事　菊
仕ふて墨ふ笑　摺ふ生ふ　々
青刃社業休め舞ふ柿面社　宗
西縄ふ毛社名　湖ふ社苗　菊

牛社奥ふ陸ふ通ふ出ふ　々
弥陀ふ寺ふ寺社物ふ　宗
西東社ふ寺ふ生ふ作ふ　菊
羽織乃物社ふ生ふ　妻風　々
兄弟社ふ社ふ寺ふ義ふ　宗
伊波乃ふ　菊
五社ふ蔦妻切吉ふ百桃菊　々
窓ふ　懲ふ社ふ　宗

海越しよ煙和の市名涼雲　栄
長力振れ蓮て埋まれ　〃
据のむつまきあるる西日の雲　宝
之百店り数子四人り　栄
狭箱明りてつん出れん板　〃
雲れ稲刈　麻沼今市　宝
一部小すまてなりての有　栄
人つ祈ら巣立ちまるとまる　〃

なるまで下雲流れ投引雲を流さ　宝
西に雲れ雲きに出れ時　栄
奏れ庭小雲の七羽ゝ竹　〃
舟のあゆこ海布れ布れ長伝　宝
袷てよれ日。京る花雲　栄
巣しりまま揺れ手拭　〃

梅室十二句
鶯菜十二句
一色十二句

墳も年けれ淡泣辞たと
しける仏はし岩気ふ其れ
荒しき人形し来まなし
仕事しつおの嘗みの
欲きゆふむしけと
書きれあそて

木の耳まれて入まて萩の聲　雅菓

忌中良夜

如何にも月を晴らと哭の聲　仝

いつまでか淋しさは秋にまかせて
見る物きくものみな淋しけれ
しかましこちも秋にあり
三昧種々の鏡耳なるに
みしきくれたも

すゝきにも立て蜻蛉は今ても哀れ　野巣母 満喜子

四十九日逮夜

もちものや念仏に交る虫の聲　仝

いはれつゝおもしき秋の夕なり
名さましたしも夜はゝ人は
それも想ひ出ておもて

憂事は露より多紀二日の雨　野巣姉 こよし女

しら露の耐の追哭は
藻思の糸しるし書とゝ
いはぬ筆でもあらし候

来る人にいはて出来す秋乃夕　桃河

世布団ゝ煤のたまる夜寒かな　友蕉

花も実も踏して蝶の落葉かれ　蟻潮

日暮れて雲中を
以て行むるみち白雲
あり
雲の多くこう雲る事思ひ　宋仙
物を物の形きよる露の数　白秋
雲の合て咲の夜に庭の秋　古渡
き〻き〻雲の中の月の草の露　蕉窓
秋蓍や俳を問あきの山　赤敵
明るまて月おこ雲も迷ふ　白仍

其折〻あるを以て全秋の暮　左言
雁のあり海をこの孔の燕　十中
以居て淋きもの字蛛の風　天来
蛛を社露消て世の者宮　孤牛
白露此袖もとる蛛手外　蕉言
月を乃る力さへ此夕　一雪

高〻篇世よ以まそかるる
ちるた風雅を法き
寺車ちつまの巻剛を

[illegible]

古墳一堆は
あるかなきかに
[illegible]

[illegible]松風常に此海の
[illegible]

秋七草　七夕ぬるまま秋玉郡　方居

江戸中は兎園に社務家社
兎園の名に詩歌連俳乃
玉素あまたあれども此冊子
もっぱらなり

小莊